

医療用麻薬 痛みにも有効

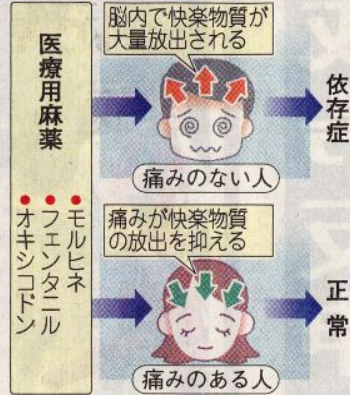
がん治療

がんの症状の一つに痛みがある。がん治療の早い段階から痛みも治療するのが世界の常識だが、日本ではなかなか普及しない。主治医が積極的でないことや、治療に使うモルヒネなどの医療用麻薬で依存症になるといった誤解が根強いからだ。

東京・大田区の弁護士の、安田道夫さん(88)は今年1月、胸の激しい痛みに襲われた。それまでも痛みはあったが、手術の後遺症だろうと思う、我慢していた。一度も聞かれなかった。

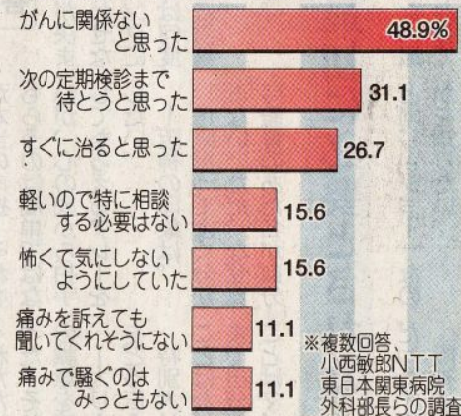
2006年に大腸がんを手術。肺などに転移を繰り返して、4回目の手術をしたばかりだった。手術後に抗がん剤を処方されたが、飲むとすぐ吐いてしまう。痛みを訴えても「よく分

痛みのある人が医療用麻薬で依存症にならない理由



依存症への誤解 主治医は情報提供を

主治医にすぐに痛みを話さなかった理由



と思っていた

元札幌高検検事長の安田さんは、覚せい剤取り締まりの第一線で仕事をすることがある。

「麻薬は覚せい剤より恐ろしい。そんな非常に偏った考えを持っていったんです」

小西部長に「恐ろしいものではない」と説明され、治療を開始。

「うそみたいに痛みがなくなり、食欲も出てきた。がん治療は早い段階から、痛みの治療とバランスを取って進めてほしい」。安田さんはそう言い残し、8月に亡くなった。

医療用麻薬を誤解している人は少な

い。

小西部長は昨年9月、痛みのあるがん患者85人にアンケートをした。主治医に痛みを話していない人が11人、話したのに治療を受けていない人が21人

いた。「医療用麻薬を使っても寿命が短くなることはない」「依存症になることはほとんどない」「幻覚や認知力の低下はほとんどない」「がん治療への影響はほとんどない」といった正しい知識を持つている人は多くても半数程度だった。

痛みを感じてもすぐに主治医に話さな

た人は45人。そのうち「主治医が痛みの治療を重要視しており、痛みの有無を常に知りたがっているという態度だった」としたらもっと早く伝えていた」という人は57・8%で、そういう主治医なら「聞かれたら伝えた」という人は20%だった。がんについて最も影響を受ける情報源としては「医師」と答えた人が圧倒的に多かった。

調査結果を踏まえ、小西部長は「主治医の態度が変われば、患者さんはもっと痛みを伝えるようになるのではない。主治医が医療用麻薬に関する知識を提供する必要もある」と指摘する。

「がんの専門医は自分の手術で治すことが生きがい。治らなかった人を敬遠したい気持ちがある。医師だけでなく看護師や薬剤師を含むチームでかわり、痛みの症状を聞き、どういう治療をすべきか考えなければなら

職場不適応

後援会N.T.T.大